

## キリストの祈り

2010.2.9(火)  
ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

出エジプト記 32章32節

「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」

ローマ人への手紙 9章3節

もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、呪われた者となることさえ願いたいのです。

ただ今読んでいただきました二箇所は、みなさんよくご存じです。この箇所について、もちろん学んだこともあります。しかし最近このように祈る人はあまりいないのではないのでしょうか。

はっきり分かりませんが、今六百何十人の人が、いわゆる祈り当番に入っているのです。今朝いただいた、ある兄弟からのメールを読んでもらいました。「祈るようになったのは良かった！」と記されていました。30分では足りないらしいです。祈りながらみことばを読んだり、みことばを読んで祈ると、本当に主は働いていてくださるのです。

先日、2月7日だったのですが、市川で集会があり、一人の姉妹が「今日は私の誕生日です。22年前の今日、私は悔い改める恵みにあずかるようになり、イエス様に頼るようになって幸せになった！」と。彼女の母親のところにも行きました。そのお母様のこともぜひ覚えて祈ってほしいです。その方はK・H姉妹で、93歳です。

8日にも同じような電話がありました。横浜集会の兄弟です。「5年前の今日、イエス様は私の心の目を開いてくださったので、ありがとう！」と言うようになったのです。アルコール中毒者で、またスリップしてしまったのですが、悔い改められるようになったので本当に感謝です。

今日の集いも喜びの集いです。それはなぜ...?悔い改めることができるからです。後で証しする、N・T姉妹のお母さんの姉妹を知るようになったのは、今日証しをする子どもがまだ生まれていなかった、那珂湊時代のことでした。そのように考えるとやはり感謝なことですが、私たちはもっともっと祈らないと駄目なのではないでしょうか。

エレミヤは次のように書いたのです。

「刈り入れ時は過ぎ、夏も終わった。それなのに、私たちは救われない。」

このみことばをもとにしてスイスのある神学校の創設者は一つの歌を作りました。以前にも紹介したことがあります。私は初めてその歌を読んだとき本当に感銘を受けました。

恵みのときは終わりに近づいている。広い世界に、今や静かに終わりの日が近づいている。遠い裁きの底から不安な叫びが聞こえてくる。私たちの真っ暗な夜には決して光が差し込まない。私たちを照らす神の恵みなくしては、私たちは苦しみと闇の中、怖い道を行かねばならない。永遠に、永遠に。あなたたちは歌い、喜びに満ちている。自分は神の子であると言う。私たちは死の生けにえであり、恐怖に満ち、ひどい苦しみに満ちている。あなたがたはなぜ立ち止まったままで、夜の始まる今、私たちを救おうとしないのか。あなたがたはなぜ神様がそのひとり子をつかわして、私たちを愛していることを教えないのか。あなたたちの怠慢により、私たちは、それを知らずに希望なく滅びゆくのだ。私たちは死ぬために生まれたのだろうか。「死」は、永遠から永遠に至る私たちの運命なのだろうか。

私たちには星が輝かない。約束の光も照らされない。遠くの方に裁きの雷が聞こえる。なぜ、なぜあなたがたは急がないのか。神は、「行って全世界に十字架の勝利者を宣べ伝えよ」とおっしゃっているのに。あなたたちは私たちの哀れなこころのために喜ばしき知らせを持っている。傷を癒す薬を、苦痛を永遠に癒す薬を持っているのになぜそんなに長く沈黙しているのか。あなたたちの信仰の岩に至る道を示すことばを私たちに聞かせてください。私たちの涙をぬぐってください。私たちが死につくのもあなたがたの責任です。

私たちの罪は私たちを悩ませ、夜は近づいている。私たちは、私たちのたましいをサタンの方に与えなければならぬ。永遠に、永遠に。遠くの国々から幾百万という人が、「収穫の主よ、聞きたまえ」と呼んでいる。

私たち信者に新しい恵みを与えてください。私たちの罪を赦してください。待ち焦がれているたましいのところに、「十字架のことばを運ぶ者」とならしめたまえ。彼らが永遠に滅びないように。

あるときは、兄弟姉妹が本当に一つだったのです。買い物に行っても、吉祥寺に行っても、会う人ごとに「イエス様」を伝えなければ平安がなくなる、と。このような精神を持つことこそ大切なのではないのでしょうか。

人を救うためにイエス様は如何に悩まれたのか、苦しまれたのか。よく考えるとやはりイエス様を知らない人々のためにもっともっと主を紹介すべきなのではないのでしょうか。イエス様の精神こそが、私たちを支配すべきではないのでしょうか。

今、司会の兄弟も言われたように、私たちはただ救われるために救われたのではありません。「与えられている使命」とは、「主の器となる」ことです。器そのものはいしたものではありません。使わなければ全く役に立たないものです。私たち信者もそうなのです。主によって用いられなければ悲劇的です。

今読んでいただきました二箇所の二人の男モーセとパウロも、救われただけではなく、彼らは「主に仕える者」でした。どのような精神で主に仕えたか、この二箇所を読むと分かるのではないのでしょうか。

モーセとパウロは、各々、旧約聖書と新約聖書を代表する「偉大な主に頼る人」、「主に用いられる器」でした。ですから、この二人が奉仕に対してどのような態度をとったかを考える必要があるのではないのでしょうか。私たちも一人残らず、主に仕え、主に用いられたいと願っているのではないのでしょうか。ですから、みこころにかなう精神とはどういうものなのか知るべきではないかと思えます。

モーセとパウロのこの告白は、単なる証しではないようです。二つとも「祈り」です。「祈りのことば」です。そしてこの祈りのことばを通して、みこころにかなう精神がどんなものであるか、知るようになることができるのではないかと思えます。このことばを読むと直感的にピンとくることは、モーセとパウロは「全く自分に死に切っていた」ということです。自分はどうでもいい、二人ともこの態度をとるようになりました。

モーセは、「同胞のためなら、いのちの書から私の名が消されても構わない」と真剣に祈ったのです。心から祈るようになったのです。もちろんパウロの場合もそうでしょう。「同胞のためなら、自分は呪われてもかまわない」と祈っています。

この二人のように、己に死に切った人がほかにいるのでしょうか。この二人の主のしもべたちは、全く自分を忘れたのです。自分の目的も、自分の願いも、自分の利益も全く頭の中ではありませんでした。もちろん、彼らは奇跡を経験したのではなく、奇跡そのものになったのです。普通はあり得ないことだからです。主に選ばれた人々、即ち「まことの教会」こそが、モーセとパウロのすべてでした。自分の祝福、自分の義、自分の誉れ、それらは全く二人にとって問題ではなかったようです。別のことばで言いますと「主の民」、「主のからだなる教会」は、モーセとパウロのいのち、彼らにとってのすべてでした。

この二人は、自分の持ち物、自分の時、自分の力、自分のいのちは、「主のからだなる教会」のためにあるのだ、「主にある兄弟姉妹」のためにあるのだと固く信じたのです。もちろん、誰かによって洗脳されたのではありません。主の霊に支配されるようになったからです。もし信じる兄弟姉妹が霊的に成長せず、悩みを持ち続けているにもかかわらず、主の御前にとりなして祈ることができないなら自分の生きがいはない、と主のしもべであるモーセとパウロは告白しています。これこそ、みこころにかなうありかたなのではないで

しょうか。主が私たちに与えようとしておられる精神ではないでしょうか。もう一度読みましょう。

出エジプト記 32章32節

「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」

ローマ人への手紙 9章3節

もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

彼らは立派だったというよりも、彼らのうちに主の霊が働くことができたのです。二人の祈りを読むと、二人には共通しているところがありました。即ち二人が祈りに導かれた原因は、救われていない人の悩みではなく、「信じている者の罪」でした。イスラエルの民、即ち「主の選民」は、エジプトの国から救い出されました。(素晴らしい経験をしたのです。)

これはもちろん、新約聖書では「主に選ばれた民」と言えます。罪赦され、救いの確信をいただきながらも持っている信者の罪を、言い表わしているのです。

主の憐れみによりエジプトから救い出されたイスラエルの民は、主の恵みをまもなく忘れました。モーセがシナイ山に入っている間に、とんでもないことをしてしまったのです。モーセの来るのが遅いと思って、アロンの導きにより金で牛の偶像を造り、その自分たちが造ったものを礼拝するようになりました。(考えられないことです。) 主の救いを経験した人々が偶像礼拝者になってしまいました。主のなさったことを全く忘れてしまいました。

モーセは、そのためにとんでもない道を行くようになったこれらの民のために祈っています。主のもとに帰って、そして言いました。

出エジプト記 32章32節

「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」

「あなたの書物から」とは、つまりいのちの書からということです。

ローマ書9章を読むと、同じようなことが書かれているのではないのでしょうか。イスラエルの民は、主から離れ、主に背き、ついにひとり子なる救い主イエス様を十字架につけてしまい、考えられない過ちを犯してしまったのです。この恐るべき罪を犯した民のために、パウロは祈りました。

ローマ人への手紙 9章3節

もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから

**引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。**

ちょっと考えられない祈りではないでしょうか。この祈りを読むと、モーセとパウロは愛するに値する者のために祈ったわけではありません。悪魔と結びつき、罪を犯して、愛そうとしても愛することのできないような人々のために、二人は祈っているのです。このことを考えると、私たちの心に何か教えられるものがないでしょうか。私たちが愛して、その愛に応えてくれる人々のために祈ることは嬉しいことです。喜びです。簡単です。

しかし、モーセとパウロの場合は、全く違いました。モーセとパウロの愛に全く応えてくれない人々を愛し、愛して愛し抜いた二人でした。私たちも、主のもとから離れて行った兄弟姉妹に対して、同じ心の態度を持ちたいものです。

モーセとパウロにはそのほかにも共通している点があります。たとえばモーセもパウロも、心からその人々を愛していたにもかかわらず、自分のすべてを捧げた民に誤解されてしまいました。つまり、いじめられたということです。

モーセは、イスラエルの民をエジプトから解放しようと思い立ったとき、イスラエルの人々に誤解されてしまいました。自分の身に危険を覚え、逃げなければならなかったのです。また、民を導いて荒野をさまよった四十年の間、モーセはどれほどこのイスラエルの民に誤解され、民から苦しみを受け、民のために悩んだか分かりません。

パウロの場合も、モーセと同じだったのでしょうか。信仰を同じくするイスラエルの民によって彼はいじめられ、迫害され、誤解され、悪者のように取り扱われてしまいました。しかし、主のしもべであるこの二人は、自分を理解してくれない人々のために自らの生涯を与え尽くし、捧げ尽くしました。

モーセは、彼らが自分をいじめ抜いた民であることをよく知りながらも、なお主の前にとりなしているのです。『今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。』と。「彼らの罪を赦してやってください」と祈るモーセの心の中には、民に対する苦々しい思いはひとつもありませんでした。これは考えられない奇跡そのものです。

パウロも、同じ態度をとりました。主の前にひれ伏して『もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。』と。

これこそ、主が私たちに与えようと思われる精神ではないでしょうか。私たちの主イエス様の場合はそうだったのでしょうか。主イエス様は呪いとなられました。これは何という犠牲でしょう。私たちの罪のために、父なる神は、ご自分にとってすべてのすべてである御子イエス様を捨てられたのです。御顔を背けられました。御父の沈黙は、イエス様にはこれまで経験されたことの無いことでした。想像することさえおできにならなかったでしょう。御父はいつも聞いてくださるのです、イエス様は何があっても、頼ることがおでき

になりました。しかし今回は十字架につけられる前に、既にイエス様はご自分が十字架につかなければならないとお分かりになりました。「罪のかたまり」とされ、わたしは「呪われ」、「捨てられる」と。イエス様は、一番つらいそのことに耐えてくださいました。

また、イエス様は、地上における生活の間、多くの罪人に「いじめられ」、「責められ」、「誤解され」通してました。ご自分を誤解し続けた兄弟姉妹たちのために、十字架の断末魔の苦しみの中で、イエス様は祈られました。「我が神、我が神」と。初めてです。それ以前は、いつも、「父」、「我が父」と祈られたのです。初めて、「我が神、我が神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と、言わざるを得なかったのです。しかしイエス様はご自分を見捨てて、否んだ人たちに対して、「兄弟」と呼びかけるのを恥とされませんでした。これが、イエス様のお心を動かしている精神でした。

イエス様は、愛される価値のない私たちのために呪われたものとなってくださったのです。このイエス様の霊は、パウロのうちにも生きていました。パウロはやはり、イスラエルの民のためならこの身は呪われても構わないと思っただけではなく、祈ったのです。願ったのです。心から…。私たちはこの「主の標準」から何と遠く離れていることでしょう。

もちろん今話しましたように、モーセとパウロが立派だったわけではありません。しかし、主の霊が彼らを導くことができ、用いることができたのです。そして二人について考えると、主のご目的を実現するためには戦いが必要だったということです。

ここまで出エジプト記3 2章とローマ書9章から、モーセとパウロについて考えたのですが、ではここで出エジプト記3 2章とローマ書9章の前にどのようなことが起こっていたのか、見るべきではないでしょうか。

出エジプト記3 1章は本当に素晴らしい章です。モーセはシナイ山に入り、そこで主と親しい交わりを持っていたのです。四十日間、素晴らしい時を過ごしたに違いありません。主から幕屋のひな型を見せられました。ですから、シナイ山は「啓示」の山です。聖なる主のみこころが明らかにされた山です。そして啓示された幕屋は、言うまでもなくイエス様を象徴するものです。主はご自分が住もうとされる幕屋の模範をモーセに示されました。長さ、幅、高さ、どのような材料を使うべきか、細かく教えられました。主は、モーセに示された幕屋にお住みになって、主のご栄光をお現わしになりたかったのです。モーセにとって、幕屋が示されたということは素晴らしい体験でした。しかし、示された幕屋の建設はすぐにはできませんでした。3 2章を読むと、イスラエルの民が悪魔に惑わされてしまいました。「主よ、導いてください。教えてください」と、そのような気持ちが全くなかったのです。イスラエルの民は墮落しました。モーセにとってこれは考えられない悩みであり、苦しみでした。また戦いだったでしょう。主のご目的を実現するためには、いつも戦いが伴います。

同じくローマ書8章を読むと、これも出エジプト記3 1章に劣らず素晴らしい章です。  
ローマ人への手紙 8章1節、2節

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

ローマ人への手紙 8章17節

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人でもあります。

とあります。

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

ローマ人への手紙 8章28節、29節

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

すべてはすべてです。大部分ではありません。確実です。

主はあらかじめ定められた人々を更に召し、召した人々を更に義と認め、義と認めた人々には更に栄光をお与えになりました。このローマ書8章は、本当にすごい章です。31節からもう一度読みましょう。

ローマ人への手紙 8章31節から39節

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあります。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある

者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

『私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、...私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。』これはパウロの証しです。

もう心配ない。安全です。このローマ書8章を読むと、私たちは高いところへ思わず知らず引き上げられて行くような気がします。この章を読んで行くと、主の永遠からのご目的が明らかになるのです。御子が多くの兄弟たちの中で長子となられる。これが、主のご目的です。更に続いて9章、10章を読むと、全く内容的に違うことを書いているのです。本当の続きは12章4節、5節です。主のご目的の実現について書かれています。

ローマ人への手紙 12章4節、5節

**一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。**

とあります。

しかし今話しましたように、8章と12章の間には非常に暗いことが書かれています。特別に選ばれたイスラエルの民が主から離れ、約束された救い主であるイエス様を十字架につけて殺してしまった、悲しむべき陰惨な出来事が書かれています。モーセとパウロは、二人とも素晴らしい主の奥義を上から示されていました。即ちモーセは、神の家、神の住まい、幕屋を教えられ、パウロは同じく神の宮、神の住まい、まことのからだなる教会を教えられています。しかし二人とも、この主のご目的を示されて、それを実現するまでの間は非常な戦いがありました。民は金の牛に礼拝を捧げました。主から離れてしまいました。悪魔は今、私たちの生まれながらの性質を用いて、主のご目的を実現させないように働きかけています。もし、私たちが弱い点に気づくなら、そのまま主に今日すべてを新たにゆだねるべきではないでしょうか。自分のありのままの姿で立つことをしない人は主を否定することになります。主の御前では、私たちは、貧しい者であり、どうしようもない惨めな者であり、憐れむべき者であり、目の見えない者であり、裸の者である、と黙示録にあります。主にすべてを捧げ、私たちのうちに私たちを通して主に働いていただきたいものです。

主の宮はいったいいつ建てられるようになったのでしょうか。恐ろしい戦いの後でした。即ち偶像礼拝者を除くという恐ろしい戦いの後でした。モーセとレビの子たちは、偶像を捧いだ人々を殺さなくては、除かなくてはならなかったのです。大変なことではないでしょうか。

出エジプト記 32章25節

モーセは、民が乱れており、アロンが彼らをほうっておいたので、敵の物笑いとなっているのを見た。

証しではなかったのです。

出エジプト記 32章26節から28節

そこでモーセは宿営の入口に立って「だれでも、主につく者は、私のところに。」と言った。するとレビ族がみな、彼のところに集まった。そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。おのおの腰に剣を帯び、宿営の中を入口から入口へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ。」レビ族は、モーセのことばどおりに行なった。その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。

結局殺されてしまったのです。

出エジプト記 32章29節

そこで、モーセは言った。「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らっても、きょう、主に身をささげよ。主が、きょう、あなたがたに祝福をお与えになるために。」

私たちの場合も同じだと信じます。心の偶像が取り除かれ、自分の利益、自分の考えを主の前に恥じるようになって初めて、主の宮が建てられて行くのです。それまでの間には戦いと悩みがあります。パウロはガラテヤという地方に住んでいる兄弟姉妹にこの戦いを戦いました。ガラテヤ書を読むと、パウロがガラテヤ人のために恐るべき戦いをしたことが分かります。彼らは誤ったユダヤ教に足を踏み入れてしまい、掟に縛られ、その霊的状态は荒野をさまよったイスラエルの民のように荒れに荒れてしまいました。主のご目的が実現されて行くところにはいつも戦いがあります。主のご目的は、ご自分の住む家であるまことのイエス様のからだである教会を建て上げることです。エペソ書1章最後の23節に、そのことが書かれています。

エペソ人への手紙 1章23節

**教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。**

「教会」はもちろんひとつの組織ではありません。人間の造るものではありません。

この教会が実現すると、あらゆる問題はたちどころに解決するようになります。この教会が建て上げられていくには多くの悩みや苦しみや誤解が伴うでしょうけれど、「栄光に満ちた主の教会」が建て上げられて行くことが約束されていますから間違いありません。

今まで二つの点について考えました。

即ち、モーセとパウロのうちに宿ったイエス様の精神について。

それから、主のご目的を実現するための戦いについて。

そしてもう一つ三番目。すべてを捧げることの大切さ、必要性について。

主のご目的を、私たちは上から教えられ、知るべきです。これは頭の知識とは全く違います。主がモーセとパウロに示されたように、私たちにも既に示して下さったのでしょうか。そして、その主のご目的が達成されるように、私たちのすべてを捧げて良いと思うのでしょうか。

すべてを主にお捧げすることは考えられないほど大切なことです。すべてをお捧げするとき、自らの利益、自らの立場、自らの名誉、それらのものはどこかへ行ってしまいます。ご目的は何かを、頭の知識ではなく心の目を見て、すべてを主にお捧げするとき、教会、主にある兄弟姉妹がその人のいのちとなり、すべてとなるはずです。モーセとパウロの場合はそうでした。

モーセは、イスラエルの民を思い、主の御前に心を注ぎました。『今、もし、彼らの罪をお赦し下されるものなら。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。』イスラエルの民が立ち直るか、または自分が駄目になるか、どちらかを主に迫っているモーセの姿が目には浮かぶような気がします。

すべてを主に捧げ主の家を思うとき、二つの道を選び取ることはできません。私たちを通して主の家が建てあげられるか、または私たちが駄目になるかのどちらかです。主が私たちを通してご自身の思い通りに働くことがおできになるために、自分で何か役割を演じようと思わないようにしましょう。自らは何の力もない者だからです。モーセはこの祈りの中で言っています。「自分は価値のない者だ、私の救いや私のいのちは必要ではない」と。

またパウロも、「もし主のみこころが信じる同胞のうちになされていかなければ、私は何のために救われ、何のために生きているのか分からない」と言っています。主が私たちに「主のみこころの全てを、主のからだなる教会に傾けておられるということを示して下さい」とは何と素晴らしいことではないでしょうか。

集会、またいたるところの集会が、みこころのままに主によって建て上げられなければ、どうして救われたのか全く分からなくなってしまいます。私たちはなぜ救われたのでしょうか。何かを得るためでしょうか。天国に入るためでしょうか。いろいろな祝福をいただくために救われたのでしょうか。確かに多くの方はそれらのために救われたとと思っているのですが、聖書を読むと決してそうではありません。私たちは主のご目的を成し遂げる「主に仕えるしもべとなる」ために、救われました。この主のご目的を成し遂げるために、いろいろな値を払わなければなりません。主の家を建て上げるという主のご目的を成就するためには、いのちをも捧げなければなりません。

イエス様は、マタイ伝 16章 25節に次のように言われました。

マタイの福音書 16章 25節

**「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」**

主のからだである兄弟姉妹のためなら、死も厭<sup>いと</sup>わない。兄弟姉妹は自分のすべてであると思うまでに、主イエス様と一つになっているのでしょうか。私たちは主の家である教会、そして主にある兄弟姉妹一人一人が自分にとってすべてとなっており、この「靈的知識」がいのちとなっているのでしょうか。

この主の家を建て上げたいという願いはモーセとパウロのすべてでした。二人は奉仕に際しても自分の名誉を求めず、ただただ主にのみ栄光あれと願ったのです。エペソ書 5 章 2 7 節のように、「主の教会」を建て上げるためにいのちをかけていました。

エペソ人への手紙 5 章 2 7 節

**ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。**

とあります。

主のご目的とはそのことなのです。パウロは前に言いましたように、救われていない人々のためにもちろん祈り続けました。しかし更に祈ったのは、救われた人々のためです。「救われた人々が主に用いられないように」、これこそ悪魔の攻撃の目的です。ですから、彼は次のように書いたのです。この節はやはり、パウロの心の表われではないでしょうか。

コリント人への手紙・第二 1 1 章 2 節

**私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。**

このようにパウロは、全く証しになっていないコリントにいる兄弟姉妹に書いたのです。パウロと同じように、この目的を持って奉仕しなければ、主は私たちのことを悲しく思われることでしょう。主はモーセやパウロと同じように、私たちを通してご自分のご目的を達成されるために私たちを救われたのです。このように主に仕える準備が整っているのでしょうか。この奉仕は、死に至るまで従順に主にお従いしていく奉仕です。

最後にもう一つの点に触れて終わります。まことの奉仕に必ず伴う火のような試みについてです。主のしもべたちは、特別に激しい試みにあったことがあると告白しています。私たちが救われるためには苦しみがありませんでした。救われるためには、私たちは何の値も払いませんでした。しかし救われて主のものとして歩み始めたときから、たくさんの悩み、また苦しみが襲ってきました。これはいったいどういうことでしょうか。それは、私たちが「救われるために救われた」のではなく、「主に仕えるために救われた」からです。私たちは、「主に用いられるしもべとなる」べきです。しかし自分を「無」にしない限り、

主のしもべとなることはできません。「自分を無にする」には、激しい試みを通されなければなりません。自らを喜ばせ、自らを愛する心が、何と多く私たちの中に残っているのでしょうか。ですから、主はご奉仕を妨げる私たちの「自我」を取り除くために、いろいろな悩みや苦しみの中を通されるのです。

私たちはいったい心から主に仕えたいと思うのでしょうか。モーセとパウロは用いられました。主をお喜ばせしたいと心から願っていたからです。イエス様は、「己<sup>おのれ</sup>を空しく」なさいました。彼らもそのような精神に支配されたのです。

マタイの福音書 20章28節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

「人の子が来たのが…」は、わたしが来たのは…、です。

イエス様の証しとはそのことです。「わたしは仕えるために、いのちを与えるために遣わされた」。イエス様こそ、みこころにかなうしもべでした。私たちもまた、主のしもべとなるためにはすべてを主にお捧げしなければならないはずで、いのちさえも捧げなければなりません。「自分の自我」を、「自分の意思」を捧げなければなりません。そのために、多くの苦しみや困難を通らなければならないでしょう。この試みを通ったとき、「仕える器」となります。

民数記 12章3節に、モーセについて考えられないことが書かれています。モーセは、ご存じのように怒りやすい男でした。あるときエジプト人を殺してしまったのです。しかし、主の霊に導かれるようになって、変わりました。

民数記 12章3節

**さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。**

モーセがこのように言われるようになるまでには、想像に絶する試みを通されたのです。旧約聖書の中でよく出てくる文章は、「神のしもべモーセは、…」です。モーセは「主に仕える器」となりました。同じ御霊は、パウロに対して、「イエス・キリストのしもべ」と呼んでいます。パウロは地にひれ伏し、心から祈って、「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて呪われた者となることさえ、願いたいのです」と言っています。

これが、主が私たちにも与えようと望んでおられる精神なのではないでしょうか。祈りの輪が作られた理由はこのためなのです。私たちも、「主よ。語ってください。しもべは聞いております。何があってもあなたのご栄光が現われますように」と祈り続けましょう。

了